

インタビュー日：平成30年6月6日

2019年 ラグビーワールドカップ 日本大会に向けて

ラグーマンとして

——ラグビーの経験をお聞かせ下さい。

ラグビーとの出会いは小学生のとき。オールブラックス^{※1}と日本の試合を兄にくっついて見に行ったのがきっかけです。高校の体育の授業でラグビーをやって、おもしろくて是非やりたいとおもったのですが、兄がテニスをしていたので、私も軟式テニスをしていました。東京大学に入ってすぐ、部室に立ち寄ると先輩の勧誘を受け、そのままグラウンドで練習に参加、その後食事をご馳走になりラグビー

※1 ニュージーランド代表チームの愛称。



公益財団法人 日本ラグビーフットボール協会 会長
(株式会社東芝 名誉顧問)

岡村 正さん

部に入ることになりました。練習はとても厳しく、シーズン中は長時間、日曜日にも休まず、合宿のときは朝の6時から夜の6時まで練習していました。それでも1年のときはリーグ戦は全敗でしたが、京都大学との定期戦だけはなんとか勝ちました。2年になったときに、新しいキャプテンのもと、真剣に勝つために議論をして、個人個人が自分自身の役割を明確にし、その課題を克服するために徹底的に練習したことで、秋のシーズンは3勝を挙げました。大学時代の成果としてよく覚えています。

——ポジションはロック^{※2}だとか。

5番でした。これでも当時は身体が大きかったんです。他のポジションをやらせてもらえませんでした(笑)。ロックとして、ディフェンスはスクラム周辺のタックル、

※2 フォワードのポジションの一つ。背番号は4と5。相手チームと最前線でぶつかり、スクラムやラインアウトで中心となってプレーする。

アタックは、ラック、モール、ラインアウトの三つを徹底的に練習し、どうしたら勝てるかをいつも考えていました。当時のラインアウトはリフティングが禁止されていたので、いかにジャンプ力をつけるかも課題でしたね。

——その後東芝でプレーを続けましたね。

先輩から、東芝のラグビー部がいまひとつなので何とかしたい、来てくれと誘われて入りました。あくまでラグビーでの入社です。ところが、景気が悪くなって会社の業績が悪化したため、オール東芝のチームは廃部になってしまいました。ラグビーをやりたいと思って入ったのに、やる場所がなくなってしまった。ただ、工場ごとにチームがあったので、毎週雇われ助っ人としてあちこちをまわりました。ラグビーができる場所を探していたような感じでした。その後、レフリーの資格を取り、ラグ

ビーには35歳ごろまで関わっていました。東芝はその後東芝府中を中心に強化され、ご存じの通り、現在はトップリーグの強豪チームになっています。

日本協会から伝えたいこと

——日本協会の会長になっただけさについて教えて下さい。

2015年6月、イングランドで開催されたワールドカップの直前、当時会長の森喜朗先生からお誘いがありました。日本のラグビーを背負うには力不足とは思いましたが、日本でのワールドカップも決まっていることだし、やってみようと思いを決めました。

——日本協会としてどのようなことに取り組んでいますか。

強化と普及。その二つです。2019年に、アジアで初めてワールドカッ

プが開催されます。大会の準備は組織委員会が主体ですが、日本協会としては、代表チームを強化することと地域開催の支援を行うことがメインの仕事です。また、ワールドカップに備え、さらにワールドカップ後を見据えて、ラグビーをいかに普及させるか、いかにラグビーの精神を日本に敷延していくかというのも大事なミッションです。

——ワールドカップまであと1年と少しですね。どうして日本で開催されることになったのですか。

これには大きな意味があります。ラグビーのワールドカップが始まって30年になりますが、アジアで開催されたことが一度もありません。招致に成功したのは、ラグビーを旧宗主国から全世界のスポーツにしたい、日本が世界のラグビー界をこれから引っ張っていくんだという強い意志を世界に向けて宣言したことに

よるものです。アジアへの普及というのは、WR^{※3}にとっても日本にとっても大きな目標でした。

——1980年代はラグビーは大きな人気がありました。しかし、その後サッカーなどに比べて相対的に人気は低下しています。

2015年のワールドカップの南アフリカ代表戦は大きな感動を呼び起こしました。地道な取組が実を結んだものですが、これをきっかけにラグビー人気は爆発しかけている。我々の任務は膨らみかけている人気を本物にすることです。そのためには日本のラグビーが強くならなければならない。スーパーラグビーにサンウルブズとして参加し、世界レベルのプレーに接することで代表の再強化を図っているのもそのためです。

若年層のチーム数も競技人口も増えています。ただ、残念ながら、高校のラグビー人口は増えていません。一つは安全の問題もあろうと思います。それをどうやって打破するか。ルール改正、大会運営、チームや指導者への指導・研修などによって、危険なプレーを徹底的に排除することを最優先の課題として遂行し、ラグビーは安全なスポーツであるというメッセージを発信していきたいと思います。

また、ラグビーは人格形成のためにも優れたスポーツであることも伝えたい。19世紀、イギリスの

※3 ラグビーの国際競技団体。2014年に「ワールドラグビー(World Rugby)」に改称した。

※4 ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、アルゼンチン、日本の5つの国、15のクラブチームで行われるリーグ戦。日本はサンウルブズとして参戦している。





【日本ラグビーフットボール協会提供】

パブリックスクールでは、ラグビーの前身であるフットボールが教育のツールでした。代表を強くすることが喫緊の課題ではありますが、将来を考えると底辺を厚くしていかなければならないわけで、そのためにはラグビーの様々な意義をしっかりと説いていかなければならないと考えています。

——特にどんなことを伝えたいのでしょうか。

ラグビー憲章というものがあります。ラグビーが最も尊重する価値で、品位 (INTEGRITY)、情熱 (PASSION)、結束 (SOLIDARITY)、規律 (DISCIPLINE)、尊重 (RESPECT) の5つの原則からなります。その中でも核になるものが品位であり、誠実さとフェアプレーから成り立っています。

最近ではスポーツに関係するトラブルがニュースで大きく報道されることが増えてきました。スポーツのあり方がこれほど問われる時代はこれまでなかったでしょう。

プレーヤー、指導者、その他ラグビーに関わる人たちは、この5つを常に意識する必要がありますし、日本協会としても、この5つがラグビーの本質的な価値であることを世間に伝えていきたいと思っています。実際に、品位を中心にした教育の

システムを全国の都道府県協会が進めているところです。

ラグビーの魅力

——ラグビーの魅力として伝えたいことは何ですか。

やって楽しいし、見てもおもしろい。まず、15人全員が攻めて15人全員が守るスポーツだということ。同じようなスポーツはほかにありません。そして、人間のあらゆる道具を使うスポーツだということ。手を使い、足を使い、もちろん頭も使う。ピッチの上を端から端まで自由に走りまわることができる。一つのトライをとるために自分を捨てて全員が協力しあう。オールフォアワン、ワンフォアオールという言葉は、イギリス発祥の言葉ではないようですが、ラグビーを象徴する言葉です。これも同じチームのプレーヤーに対する信頼関係やリスペクトがなければ成り立ちません。

——「ノーサイド」という言葉が有名ですね。また、公式戦の後、両チームがいっしょにお酒を飲みながら語り合う慣習がありますね。

他のスポーツは、試合終了を「ゲームセット」「タイムアップ」などと言いますが、ラグビーは「ノーサイド」です。試合が終われば敵も

味方もないという意味です。試合後の交流を「アフターマッチファンクション」といいますが、これも他のスポーツにないラグビー特有の文化です。試合中は激しくぶつかり合いますが、試合が終われば両軍とも友だち、だからお互い語り合おうよという精神から来ています。これも先ほどの話と重複しますが、双方に相手をリスペクトする気持ちがなければできません。

ワールドカップに向けて

——ワールドカップまであと1年少しです。準備状況はいかがですか。

ワールドカップは全国12の会場で行われます。スタジアムの建設を含めて、整備は順調に進んでいます。

あとはどれだけ多くの人がスタジアムに見に来てくれるかということです。チケットの販売もそうですが、ワールドカップの場合は海外からもたくさんの人が訪れます。日本協会を含め、各地域でおもてなしの準備を進めているところです。

このためには、ボランティアも相当数が必要であり、4月から募集を始めています。1万人のボランティアに集まっていただいて、全国各地でそれぞれの特性に合わせた仕事をさせていただくことになっ



【日本ラグビーフットボール協会提供】

ています。こちらの準備も順調に進んでいます。

とはいえ、初めてのことから、過去のワールドカップを参考にして、運営ノウハウをしっかりと身につけていなければならないと思っています。昨今のテーマはハイテク化です。技術の著しい発展に伴い、TMO^{※5}を含め、日本全国や世界にレベルの高い映像をいかにして送るかという、今までにはなかった課題が我々に課せられています。

——ズバリ、日本の成績予想をお願いします。

2015年は予選プールで3勝1敗でした。決勝トーナメントに進める成績でしたが、勝ち点がわずかに足りませんでした。来年の自国大会では、2015年大会以上の成績、つまりベスト8に残って決勝トーナメントに進むことが目標です。日本が所属するプールAには、日本のほか、

アイルランド、スコットランド、ロシアが所属しています。あと一つの国はまだ決まっていません。決勝に残るためには3勝しなければならない。世界ランキングは、アイルランドが2位、スコットランドが7位、日本は11位です。アイルランドとスコットランドのどちらかには必ず勝たなければならないわけですから、とても厳しい戦いになります。しかし、ホームの利を生かし、全国の皆さんのご声援を追い風にして、何とか勝ち残りたい。これを今ヘッドコーチ以下最大の目標として日々励んでいます。

——ラグビーの裾野も広がっていますね。女子ラグビーと7人制ラグビーについても、日本協会として考えていることを教えてください。

女子ラグビーも7人制も相当のスピードで広がっており、日本協会としても力を入れているところです。女子ラグビーは持って生まれた身

体の柔らかさだろうと思うのですが、見ていてとても迫力を感じます。7人制も、もともとは15人制のトレーニングのために開発されたものですが、個人のスキルがゲームに大きく反映されることもあって、とてもおもしろいスポーツです。7人制は男女ともリオデジャネイロからオリンピック競技になり、男子は強豪のニュージーランドに勝ち、4位に入賞したことで大いに盛り上がりました。今後15人制と同様盛んになればならないと思って力を入れているところです。

法との関わり

——最後に、ラグビーと法との関わり、弁護士に期待することを教えてください。

スポーツの世界でも、法的なものの見方とは無縁でいられなくなってきています。「スポーツだからいいじゃないか」と言われていたことが通らなくなっている。この点が昔と大きく違ってきているところだと思います。乱暴なプレーや怪我への対処、選手とチームとの契約上のトラブルなどいろいろなところで法と接します。その場合も、先ほど説明したスポーツの本質的な観点から、ラグビー憲章の5つの考え方を軸にご指導いただきたいと思います。

——インタビューでは、日本協会の仕事だけではなく、会長のラグビーへの愛情を強く感じる事ができました。ワールドカップの成功と日本チームの健闘をファンとして心より期待しています。

(インタビュー：宮島繁成)

※5 テレビマッチオフィシャル。試合中、ビデオを使用してレフリーの判定をサポートするシステム。

※6 2018年6月25日時点。